

言語社会研究科 博士審査要旨

論文提出者 布川 恭子
論文題目 ムージルの『特性のない男』における〈家族の発見〉
— 〈比喩〉の具現としての親和性 —
論文審査委員 古澤 ゆう子教授 尾方 一郎教授 久保 哲司教授

1 本論文の構成

本論文は、ローベルト・ムージル Robert Musil [1880—1942 年] の未完の大作『特性のない男』 *Der Mann ohne Eigenschaften* (第一巻 1930 年、第二巻部分 1932 年) における「親和性／親戚関係」 *Verwandtschaft* のモチーフを明らかにする試みである。主人公の「生」を左右する「キョウダイ愛」 *Bruderliebe* 「シマイ愛」 *Schwesterliebe* 「キョウダイシマイ愛／同胞愛」 *Geschwisterliebe* の関係に注目し、登場人物の疑似親戚関係・親和性は「比喩」 *Gleichnis* の具現であるとの論を展開する。

本論文の構成は以下の通りである。

記号	3
序章	4—7
第一部：【比喩と親和性】	8
*補足：『特性のない男』について	9—12
第一章：同じことが起こる	13
第一節：問題提起および先行研究	14—20
第二節：家族の構図	21—28
第二章：生からの休暇	29
第一節：生の二本の樹	30—35
第二節：恋愛と友情	36—55
第二部：【千年王国へ（犯罪者たち）】	56—59
*補足：『遺稿』について	60—63
第三章：キョウダイシマイ愛と熾天使の愛	64
第一節：キョウダイシマイ愛	65—79
(1) 【遺稿】 1921—1930 年	
(2) 【遺稿】 1930—1932 年	
(3) 【遺稿】 1932—1935 年	
第二節：熾天使の愛	80—90
(1) 【完成稿】 1930・1932 年	
(2) 【遺稿】 1930—1932 年	

(3) 【遺稿】 1932-1936 年	
第四章：キョウダイ愛とシマイ愛	91
第一節：キョウダイ愛	92-106
(1) 【遺稿】 国家	
(2) 【遺稿】 大衆・戦争	
(3) 【遺稿】 リントナー	
第二節：シマイ愛	107-115
(1) 【遺稿】 アガーテ	
(2) 【遺稿】 対象のない愛	
(3) 【遺稿】 蠟人形・袋小路	
第五章：ドッペルゲンガーとピュグマリオン	116
第一節：ドッペルゲンガー	117-127
第二節：ピュグマリオン	128-138
第三部：【家族の発見】	139
第六章：部分と全体	140-141
第一節：フラクタルな世界	142-151
第二節：構成的イロニー	152-159
第七章：分けられないが一つにもなれない者たち	160
第一節：家族を発見すること	161-176
第二節：所有欲の前形態	177-184
終章	185-187
文献	188-200

2 本論文の概要

本論は三部構成となる。第一部では、第一章で、登場人物の好悪や愛憎が疑似家族構図として分析され、親子的上下関係ではなく、キョウダイシマイという平等関係が志向されること、小説第一巻の主要部をなす第二部のタイトル「同じことが起こる」は千編一律の世界における「典型」「特性」の循環を表していることが考察される。第二章では、主人公の考える「生」においては、人間が「特性」を持った「現実世界の自分」と「陰の自分」、または「愛（友情や恋愛）」と「暴力（たとえば数学者の論理的一義的定義）」に分裂すること、「生からの休暇」をとることで分裂からの脱出が試みられるとの解釈がなされる。

第二部では、遺稿の状態と成立段階が補足で説明されたのち、小説の構想・成立過程が「キョウダイシマイ（Geschwister）愛」「熾天使の愛」「キョウダイ（Bruder）愛」「シマイ（Schwester）愛」の項目にそって整理検討される。遺稿の変遷をみると、年代的にまず「キョウダイシマイ愛」の考察からはじまり、問題が深化され、最終的にピュグマリオンのデカダンスあるいは病的症状に行き着くことがわかる。

その結果、多くの研究論文で注目される「キョウダイシマイ愛」という言葉自体は完成稿に一度もあらわれないが、「キョウダイシマイ的なもの」が求められる際には「熾天使の愛」と呼ばれる「シマイ愛」が関わり、現実には達することができない「シマイ愛」の代替として、「キョウダイシマイ愛」が求められているという推論が導かれる。「シマイ愛」は、「セクシュアリティのない愛」、「対象のない愛」であり、悟性でもって事物を把握しようとする「キョウダイ愛」を受け入れないが、代替であるがゆえに変容しやすく、さらに対象がないため、袋小路に入り込みやすく、屍姦や露出狂などの病的なものが生じかねない。また「キョウダイ愛」も、それ自体は当初「徳」を持つが、現実的目標の設定・志向の過程で「同胞愛」「祖国愛」そして「戦争」へと向かうコンテキストを包含している。

こういった理想的な愛の現実化の過程における変容の考察において、ムージルの晩年には「ドッペルゲンガー」「ピュグマリオン」のモチーフが浮上する。ドッペルゲンガーは、はじめは「異性における」と限定づけられるが、しだいに性別を超えたものとして意図されていく。そこにはいわば大衆あるいは人類全体と一体化するといった方向性がみてとれる。これはキョウダイ愛の変形であるともみることができる。一方でピュグマリオンに係わるモチーフは、シマイ愛が行き着く一つの形で、人形愛や屍姦にも通じ、このモチーフもまた「同じことが起こる」世界へと向かう傾向を持つ。この二つのモチーフは「キョウダイ愛」や「シマイ愛」の現実化過程における可能性であるが、その際の変容回避と親和性維持に関する分析が第三部で試みられる。

第三部では『特性のない男』におけるイマギネールな親和性／親戚関係の問題が取り上げられる。すなわち、他者のなかに「家族を発見する」こと、そしてまた現実の家族のなかに可能性としての家族（現実の妹に、可能性としてのふたごのシマイ、シャム双生児の片割れを見出すこと）を発見することである。

第六章はこの未完の小説の「部分」と「全体」の関係を論じている。ムージルは『特性のない男』を、「部分」と「全体」と二回読んで欲しいと記しているが、ここに構造的に注目すべき点が二つあるとされる。まず「部分」が「全体」を、また「全体」が「部分」を取り込む入れ子式にも似たフラクタル的構造である。主人公の「生」の分裂は、登場人物各自にもみられるものであり、遺稿で確認される主人公と妹の「キョウダイ愛」「シマイ愛」関係も、他の登場人物に同じくあてはまる。すべての人々が分身状態にあり、この分身状態の人々の祖国カカーニエンにも同様の分裂がみられるからである。フラクタルとは、ある「全体」の「部分」を取り出すと、この「部分」のなかに「全体」のミニチュアが入っているもの、同じ構成要素（＝「自己相似」）によってすべてがなりたっているものである。次に小説を「全体」としてとらえることで切り捨てられた「部分」に注目することである。悟性によって、すなわち「物語の糸」でとらえて小説を「全体」として読むと、個々のわからない「部分」は切り捨てられてしまう。わからない部分とは、前後の脈絡が矛盾している箇所、唐突な描写である。これが作者のいう「構成的イロニー」の手法（第二節）である。これは、登場人物たちの既存の関係の糸を切り、それぞれ孤立していることを認識させ、しかし実は、それぞれが「親和性／親戚関係」によって結ばれている、あるいは結ばれる可能性を内在させているのだということをあらわす、エッセイ的志向であり、ドッペルゲンガーモチーフと密接な関係を持つ。

第七章では「分けられないが一つにもなれない」というありようがとりあげられる。この状態では、上下関係なく平等で、イマジネールな「キョウダイシマイ的」な親和性の地平に至る。しかし、この状態の持続は困難で、通常は「同じことが起こる」悪循環に向かう可能性を払拭することができない。登場人物それぞれが互いにイマジネールな家族を求めていること、特に小説第二巻における、その試みと挫折の軌跡が、作中の多くの箇所から跡づけられる。さらに第二節では、『特性のない男』の前身となる小品『家族の発見』の分析を援用しながら「所有欲の前形態」と名指した状態において、ひとびとは互いにキョウダイシマイ的なものとして存在することが可能となると結論づけられる。

3 本論文の成果と問題点

ムージルの作品は難解さで知られるが、なかでも大作『特性のない男』の解釈は文学的のみならず、言語的歴史的思想的諸問題の知識と多面的分析を要する。この作家の日本における研究はすでに長年の伝統を持つ。本学の名誉教授加藤二郎氏が『特性のない男』の本邦単独初訳の快挙をとげられたことをはじめ、少なからぬ研究者が意欲的な研究を発表している。著者も修士課程以来ムージル研究に取り組みドイツのマンハイム大学、フライブルク大学における学習、およびムージル資料館のあるクラークゲンフルトでの研修を経て、この論文を完成させている。これまでもいくつかの論文をドイツ語で発表しており、それらは海外のムージル研究書の文献表にとりあげられている。

『特性のない男』の研究におけるひとつの重要な潮流として、この未完の小説の「終わり」を考察する試みがある。その多くは第二巻における主人公ウルリヒとその妹アガーテとの関係に商店をしばって論じている。これは小説中でも問題となっている「キョウダイシマイ愛／同胞愛」*Geschwisterliebe* の問題である。しかしながら著者は、主人公が血縁者のみならず小説の登場人物すべてに疑似親戚関係・親和性の感情を喚起されていることに注目し、この親和性は小説中にあらわされる概念「比喩」*Gleichnis* の関係を具体的に解き明かす鍵をなしていると考え。第二巻になって登場するアガーテにかぎらず、小説全体の人物構成に視野を広げ、作品の中心をなす概念にせまる解釈である。「比喩」は、主人公が自らの「生」*Leben* を考察するうえできわめて重要な概念であり、これを具現化しているのが、小説中の登場人物たちの構図にみられる「親和性」の関係、擬似家族的関係であるとの分析がなされる。ムージルが「エッセイ」的と表現する主人公の多義的「生」への志向は、限定された現実に対して、諸々の可能な多様性を得ようとするユートピア的試行である。「特性」を定めない「特性のない」者たろうと試みる主人公は、「比喩」の表現形式のありように、不可能な結びつきを可能とする可能性を発見したが、「生の根源的な状態」とされる「比喩」は抽象的に考察されるのみで、その発展に関しては明確な回答が示されていない。というのもムージルはこの小説の複数の終結を示唆しているが、完結に至らず未完のままとなっているからである。

しかしながら著者は、ムージルの残した膨大な遺稿の分析によって、作家の晩年に浮上してきた「ドッペルゲンガー」および「ピュグマリオン」のモチーフが、「キョウダイ愛」や「シマイ

愛」の現実化の一つの可能性であると考え、本論第三部で分析を試みる。クラゲンフルトで遺稿の編纂、CD-ROM化に関わった成果がここにあらわれている。

ただしその際、テキストそのものに語らせようとするあまり、「比喩」「親和性」といった概念に関する著者自身の考えが、十分に明示されるまでには論じ切れていないという問題点がある。遺稿を網羅的に検索・整理しながら、そこから導き出される筋道を明らかにする作業がまだ半ばである箇所が見受けられるのは残念である。

さらに作品解釈が内在的分析に徹しており、歴史的視点からみた作品の特徴が見えにくいというらみがある。同時代の他作品との比較、もしくはフロイトやユングの心理学、ムーゼル自身が研究対象としたマッハ等の思想的影響関係が考察されることで、著者の主張を検証・補強する余地がある。

しかしながら、これらの問題点については、著者も今後取り組むべき課題としてじゅうぶん自覚していることが、先日おこなわれた口述試験においても確認できた。以上のことから、審査員一同は、本論文がすぐれた論文であると認め、一橋大学学術博士の学位を授与することが適当であると考えている。

最終試験結果要旨

2008年5月14日

受験者：布川恭子

最終試験委員：古澤ゆう子 尾方一郎 久保哲司

2008年5月12日、学位請求論文提出者 布川恭子氏の論文および関連分野について、本学学位規程第8条第1項に定められた最終試験を実施した。

試験において、審査員は、提出論文「ムーゼルの『特性のない男』における〈家族の発見〉 — 〈比喩〉の具現としての親和性 — 」に関する問題点および関連分野について質疑を行い、説明を求めたのに対して、布川氏は適切な説明を以て応えた。

よって審査員一同は、布川恭子氏が学位を授与されるに必要な研究業績および学力を有すると認定し、最終試験の合格を判定した。